第 25 回森林と市民を結ぶ全国の集い 2021

「森林と市民を結ぶ」新たなカタチ

～東日本大震災から 10 年、コロナ禍のいま～

報告書

■2021 年 3 月 7 日（日）～3 月 14 日（日）オンライン配信

■主　催

「森林と市民を結ぶ全国の集い 2021」実行委員会

公益社団法人国土緑化推進機構

実行委員長：内山 節（哲学者／NPO 法人森づくりフォーラム代表理事）

■後　援

美しい森林づくり全国推進会議／全国市長会／全国森林組合連合会／

全国知事会／全国町村会／全国林木材組合連合会／日本林業協会／林野庁

■事務局：特定非営利活動法人 森づくりフォーラム

森林と市民を結ぶ全国の集い 2021

目　　次

１．　開催趣旨・日程・プログラム概要・・・・・・・・・・・・・・・・2

２．　各プログラムレポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

３．　参加者アンケート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

４．　これまでの「森林と市民を結ぶ全国の集い」・・・・・・・・・・32

５．　「森林と市民を結ぶ全国の集い 2021」実行委員 スタッフ名簿・33

開催趣旨・日程

■開催趣旨

私たちの森林への期待は大きくなっています。

それは、地球温暖化に対する危機感からであり、気候変動に伴う自然災害の多発からであり、
新型コロナウイルスの脅威のなかで「自然とともにある」大切さの再認識からでもあります。

けれど、地球規模で見るとき、森林は無秩序な開発や火災ほかの災害になどによって
危機的な状態にあるところが少なくありません。
国内でも、森林を守り育んできた人たちの高齢化や減少が危惧され続けています。
自然災害のニュースで、手入れ不足のような人工林が映し出されることがあります。

「持続可能な開発目標(SDGs)」は、貧困・不平等・格差・気候変動などの問題解決をざす 17 の
目標です。誰もが幸せに暮らすための目標です。森林は、この目標と大きくかかわっています。
それは、一人ひとりの取り組みから始まります。

2021 年は東日本大震災から 10 年です。そして、コロナ禍のいま。

豊かな森林を守り育む人がいます。森林に新たな価値を見出す人がいます。
「森林と市民を結ぶ」新たなカタチを創り出そうとする人がいます。

「森林と市民を結ぶ全国の集い」では、森にかかわる様々な取り組みに出会えます。

森林と私たちのこれからを考える多くの人に出会えます。

■日程

実施日時（2021 年 3 月 7 日～14 日）	プログラム名	参加費区分
3 月 7 日（日）10:30～11:30	オンライン参加サポートプログラム	無料
3 月 7 日（日）13:00～14:30	オープニングプログラム	無料
3 月 8 日（月）19:00～21:00	宮城プログラム	無料
3 月 9 日（火）20:00～21:30	テーマ別セッション 1	有料
3 月 10 日（水）　20:00～21:30	福島プログラム	無料
3 月 11 日（木）　20:00～21:30	テーマ別セッション 2	有料
3 月 12 日（金）　20:00～21:30	岩手プログラム	無料
3 月 13 日（土）　13:00～14:30	テーマ別セッション 3	有料
3 月 14 日（日）　13:00～14:30	クロージングプログラム	無料

■参加費

区分	金額	詳細
早割チケット	2,000 円	全プログラムに参加可
学割チケット	無料	全プログラムに参加可
テーマ別セッション単発参加チケット	1,000 円	無料プログラムの参加も可
テーマ別セッション通し参加チケット	2,500 円	全プログラムに参加可
応援・協賛チケット	5,000 円	全プログラムに参加可

※上記いずれかの有料プログラムに申し込んだ参加（学割対象外）は、
3 月 7 日（日）基調講演を除く、全プログラムのアーカイブ動画が視聴可。

※2021 年 5 月に、オープニングプログラムを除く無料プログラムのアーカイブ動画を
森づくりフォーラムの YouTube ページで公開。

■実施プログラム一覧（出演者 敬称略）

◇オープニングプログラム

3 月 7 日（日）13:00～14:30

主催者挨拶	内山 節（実行委員長／哲学者） 沖 修司（公益社団法人国土緑化推進機構 専務理事）
来賓挨拶	安高 志穂（林野庁 森林利用課山村振興・緑化推進室長）
全体概要 紹介	鹿住 貴之（副実行委員長／（認定 NPO 法人 JUON(樹恩) NETWORK 理事・事務局長））
基調講演	安宅 和人（慶應義塾大学 環境情報学部 教授/ヤフー㈱CSO）
司会・進行	小野 なぎさ（一般社団法人森と未来 代表理事）

◇オンライン参加サポートプログラム ＜オンラインイベントにチャレンジ！＞

3 月 7 日（日）10:30～11:30

話題提供	星野 晃一郎（株式会社ダンクソフト 代表取締役）
コーディネーター	後藤 洋一（NPO 法人樹木・環境ネットワーク協会 事務局長）

◇宮城プログラム ＜里山・森林の利活用の意義と利用法の実践＞

3 月 8 日（月）19:00～21:00

講演	清和 研二（東北大学名誉教授）
話題提供	佐藤 光夫・佐藤 円（すみやのくらし／宮城県七ヶ宿町） 伊藤 達生（伊藤建築／宮城県川崎町）
コーディネーター	朏 昌汰 （合同会社 百（MoMo）代表社員／川崎町地域おこし協力隊）

◇テーマ別セッション 1 ＜役立つ！森林と人に関わるデータの面白さと利用のしかた＞

3 月 9 日（火）20:00～21:30

話題提供	赤池 円（私の森.jp 編集長） 石川 初（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授） 高山 範理（（国研）森林研究・整備機構 森林総合研究所上席研究員）
コーディネーター	矢島 万理（公益社団法人国土緑化推進機構 政策企画部）

◇福島プログラム ＜復興に向けた 10 年間の取り組みと新たなチャレンジ＞

3 月 10 日（水）20:00～21:30

話題提供	鵜沼 英政（NPO 法人みんぷく 事務局長） 下條 真輝（田人地区地域おこし協力隊） 鈴木 比良（福島県県北農林事務所 林業課長） 平子 作麿（ふくしまグリーンフォレスターの会 会長） 松崎 和敬（NPO 法人いわきの森に親しむ会 副理事長）
コーディネーター	塚本 竜也（NPO 法人トチギ環境未来基地 代表理事）

◇テーマ別セッション 2 ＜世界の森とグリーンリカバリー＞

3 月 11 日（木）20:00～21:30

話題提供	池田 憲昭（Arch joint vision 社 代表／ドイツ在住） 倉阪 秀史（千葉大学大学院 社会科学研究院教授） 泊 みゆき（NPO 法人バイオマス産業社会ネットワーク 理事長）
コーディネーター	坂本 有希（フェアウッド・パートナーズ／一般財団法人地球・人間環境フォーラム）

◇岩手プログラム ＜東日本大震災から 10 年 三陸岩手からの新たな挑戦＞

3 月 12 日（金）20:00～21:30

話題提供	芳賀 正彦（NPO 法人吉里吉里国 代表）
トークセッション	高橋 幸男（釜石地方森林組合参事） 三木 真冴（一般社団法人東北・広域森林マネジメント機構） 松永 充信（岩泉フォレストマーケティング）
コーディネーター	手塚 さや香（釜石リージョナルコーディネーター協議会）

◇テーマ別セッション 3 ＜オンライン・リアル双方を活かした森との関わり方＞

3 月 13 日（土）13:00～14:30

話題提供	上田 融（NPO 法人いぶり自然学校 代表） くまつ しんすけ（くまつ環境教育事務所　代表） 遠藤 隼（サシバの里自然学校 校長）
コーディネーター	水谷 伸吉（一般社団法人 more trees 事務局長）

◇クロージングプログラム

＜「森林と市民を結ぶ」新たなカタチを求めて ～地域と森とのつながり方・関わり方を探る～＞

3 月 14 日（日）13:00～14:30

パネリスト	手塚 さや香（釜石リージョナルコーディネーター協議会） 中安 祐太 （合同会社 百（MoMo）/東北大学 学際科学フロンティア研究所助教） 松崎 和敬（NPO 法人いわきの森に親しむ会 副理事長） 矢島 万理（公益社団法人国土緑化推進機構 政策企画部） 坂本 有希 （フェアウッド・パートナーズ／一般財団法人地球・人間環境フォーラム） 星野 晃一郎（株式会社ダンクソフト 代表取締役）
コーディネーター	鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON(樹恩) NETWORK 理事・事務局長）
コメンテーター	内山 節（哲学者／NPO 法人森づくりフォーラム代表理事）

各プログラムレポート

オープニングプログラム

＜基調講演＞
『残すに値する未来を考える』
安宅 和人（あたか かずと）
慶應義塾大学 環境情報学部 教授/ヤフー㈱CSO

＜司会・進行＞

小野 なぎさ（一般社団法人森と未来 代表理事）

安宅和人さん

① 講演者の発言趣旨、印象に残った発言

1. Date is king ではなく Loop is king。データを取ることが重要ではなくて、データをとってきて何に使うのか、というループを回すということが大切。情報が入ってくる入り口はたくさんあっても、その情報を使う出口が足りない。緑を取り巻く空間では何ができるのか、何をしたいのかを考えていく必要がある。

2. 単なるロハスや緑 Lover ではなく、エコノミストが回るようにすることが重要。どのような状態が良いのか、課題設定をすることが大切。 [未来の方程式 未来＝夢×技術×デザイン]

3. コロナは日本にも大きな被害をもたらしているが、今後温暖化において永久凍土からいろいろなウイルスが出てくる可能性がある。これからは pandemic ready な生活空間を作る必要がある。

都市の密閉空間よりも開疎な空間が求められている。しばらく続くコロナの時代においては、緑の空間、開疎な空間が必要。空間の刷新に大きなチャンスがある。

4. 森は地球の皮膚であり、データから見ても森林は林業的な価値よりもっと大きな価値がある。
森は木だけでなく菌類や土壌がある。菌類は大きく長く生きる生き物。土は生命体がないところには存在しない。砂と粘土と生物の死骸、微生物からできている。このような生命が森である。巨大な系として考える必要がある。森は二酸化炭素の吸収だけでなく、物質も作り、文化も作り、美しい景観を生み出し、生物多様性を保全し、災害も防ぐ。これら全てを見て森の価値や可能性を考える必要がある。

5. 「僕らはどんな未来をこれからの世代に残したいのか？」これを考えていかなければいけない。人工生命の研究からの発見は、同じ初期値、同じ条件でも同じ進化は二度と起きない。

「未来は目指すものであり創るもの」。僕らはどういう状況を作りたいのかスコープを広げシステム的思考を持って考えていく必要がある。

② ディスカッションで印象に残った発言

地方や林業における高齢化、人材不足の問題に対する質問への回答。

森の所有者が権限を手放して才能を呼び込めば新しい未来ができる。若くて元気のある人材を集めるには、自分たちの可能性を試せる場所でないと人は集まらない。地方や林業だけでなく、なぜ自分たちのところに求心力がないのかと考える必要がある。未来が作れると思えれば、才能が集ま

る。地方とか都市の問題ではない。地方と都市というものの見方はやめた方が良い。

③ 講演者のメッセージ

我々は災害立地に生きているが、先進国では森林率の高い国に住んでいる。森と災害とテクノロジーを持つ国家として何ができるかを考えられれば人類の希望になる。一緒に考えていこう。やれることから、昨日より今日、今日より明日が良い、今の森に問題があったとしても、ハゲ山より今の方が良い、次の世代に今より良い未来を残そう。

④ 報告者の感想

安宅氏の講演では、データに基づき日本の現状をあらゆる視点から伝えていただいたのちに、コロナ禍での暮らしを経験したからこそ緑がより必要であること、もう一度森林の価値を見直す意味を教えていただいた。これからは森林に関わる人や山村地域に暮らす人だけでなく、様々な業界、山村以外に暮らす人々も一緒に、夢を語り、技術をフルに活用していくことで、日本の森の明るい未来を創ることができる、という本イベントのスタートに相応しいメッセージをいただくことができた。

＜報告者＞

小野 なぎさ（一般社団法人森と未来 代表理事）

安宅和人さんと小野なぎささん

宮城プログラム

『里山・森林の利活用の意義と利用法の実践』

＜講演＞
清和 研二（東北大学名誉教授）
＜話題提供＞
佐藤 光夫・佐藤 円（すみやのくらし／宮城県七ヶ宿町）
伊藤 達生（伊藤建築／宮城県川崎町）
＜コーディネーター＞
朏 昌汰（合同会社 百（MoMo）代表社員／川崎町地域おこし協力隊）

＜テーマ＞

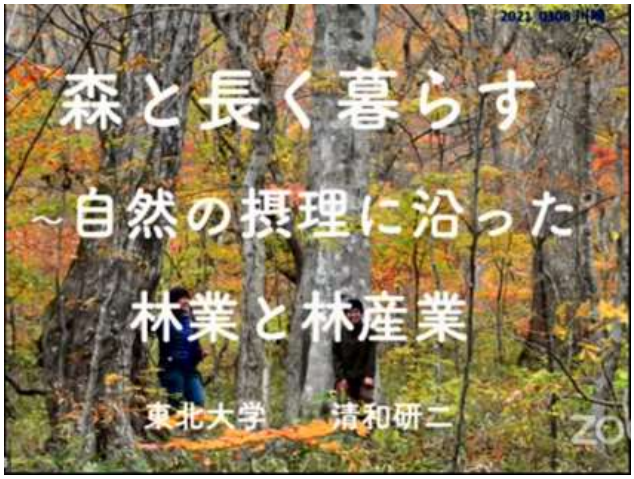
人々の生活が里山と離れつつある今、里山管理の担い手の減少により、里山の荒廃・森林蓄積の増加が進んでいる。さらには，クマやイノシシによる獣害、ナラ枯れなどの管理が行き届かないことによる里山ならではの課題も発生している。

宮城プログラムでは、清和研二さんより、戦後から現在までの二次林利用状況や、本来の森を取り戻しつつ森林を利用するための方法を、学術的知見から共有いただく。とともに、ナラやその他樹種を原料として白炭を作られている「すみやのくらし」の佐藤光夫さん、伝統工法大工でありながら、己の手で製材も行う「伊藤建築」の伊藤達夫さんからお話いただき、これからの里山利用の可能性について考える。

① 発表者の発言趣旨、印象に残った発言

１．清和研二さんの講演

現在の里山は昭和初期の日本がまだ貧しかったころの里山であり、その頃の里山の風景に戻る必要はない。世界中のどの山でも種が多様な森ほど生産力が高い。広葉樹が混ざることによって硝酸態窒素が地下に流れず、林冠窒素量が増大し生産性が上がる。したがって、現状の針葉樹主体の里山を全層間伐し、広葉樹を混ぜることによって、多様性が高く長寿命な混交林に移行することが重要である。その際、出てくる中小径材の利用を考えることも重要である。



清和研二さん講演資料

２．佐藤光夫さん、佐藤円さんの話題提供

白炭とは、高温の石窯で焼かれ、灰で消化したときに作られる炭のことを言う。代表例はウバメガシを用いた備長炭。東北にはウバメガシが分布していないため、主にナラが原料として用いられている。現在、光夫さんが炭焼きを担当し、円さんは白炭を食品に混ぜるなど新しい商品を開発し、販売している。今後は、この白炭の技術と文化を継承し、火・炭を使うライフスタイルを広めていきたい。この思いを伝えるために、Charcoal Baseという拠点を建てた。そこで色々な炭に関するイベントをやっていく予定。

３．伊藤達生さんの話題提供

個人・小規模山主は、皆伐して建材を売ることによって得られる収入よりも、植林に必要な苗代の方が高く、事業として成立しない。したがって、大工が山主となって、伐採・製材・建築を一貫して行う６次産業化モデルを提案。６次化モデルでは、初期設備投資費用少なく、乾燥が不十分な材も、曲がりの強い材も自由に使用可能。さらに、高温乾燥と運搬を伴わないため、エネルギー投入量が少ない。これを実践することによって持続可能な

林業が可能なのではないか。

② ディスカッションで印象に残った発言

8m 材を山から搬出するためには大型車が必要になりコストがかかる。それを山林でそのまま葉枯らし乾燥させて山で利用する、もしくは、乾燥してから運べばコストを減らせる。ナラなどの薪炭林は、その土地で当時必要とされていたからこそ作られた森であるから、それが現代でも必要であるならわざわざ混交林に移行する必要はない。しかし、その地域の環境条件に適合した元の固有の森に戻したいのであれば、混交林にしたほうがいい。

③ コーディネーターによるまとめ

清和先生のお話にあったように長寿の森を作ることこそが価値であり、それを作るには 200 年、300 年と長期スパンで考えていかなければならない。一方で、オープニングの安宅先生のお話にあったように、データイズキングではなく、ループイズキングである必要があり、長期スパンで森を維持するためにはどのように経済的にペイする形で森を維持するのかを改めて考えなければいけないと思う。そのために、薪炭林などをどのように使っていけばいいかを考えなければいけないと思う。

ディスカッション

④ 報告者の感想

約半年間実行委員として関わらせていただいて、今回のプログラムのテーマと編成を考えることができてとても楽しかった。私自身アカデミックにいながら、山主であるという立場であったため、研究者と現場の実践者が交わる光景というのがいかに素晴らしく重要であるかということを再認識できた。多少、運営上のトラブルはあったが、大きな事故もなく行えたことは良かった。宮城プログラムは全員が家族のような関係で行えてとても良かったと思う。このようにアカデミックな立場と実践者がお互いをリスペクトしながら密接に今後も関わっていくことが重要であろう。

＜報告者＞

中安佑太（合同会社 百（MoMo）/東北大学 学際科学フロンティア研究所助教）

福島プログラム

『復興に向けた10年間の取り組みと新たなチャレンジ』

＜話題提供＞
鵜沼 英政（NPO 法人みんぷく事務局長）
下條 真輝（福島県いわき市田人町地域おこし協力隊）
鈴木 比良（福島県県北農林事務所 林業課長）
平子 作麿（ふくしまグリーンフォレスターの会会長）
松崎 和敬
（NPO 法人いわきの森に親しむ会副理事長）
＜コーディネーター＞
塚本 竜也
（NPO 法人トチギ環境未来基地 代表理事）

＜テーマ＞

福島県の現状と、復興に向けた 10 年間の様々な取り組みについて発表する。森林だけでなく、被災者支援、コミュニティ再建などの市民による取り組みも紹介する。また後半は市民が参加する森づくりの実践例と、若者による地域での新しいチャレンジも紹介していく。

① 東日本大震災から 10 年たった、福島県の現在
（NPO 法人みんぷく 事務局長 鵜沼英政さん）

東日本大震災から 10 年、現在もその影響は様々な形で続いている。特に福島第一原発に近い相双地区では、震災後、人口の約 43％が流出した。また、福島県民の県外避難者は、現在も約 29,000 人いる。原発事故を中心に様々な問題が生じており、それが複合的にのしかかっている。産業も、医療も、生活も、環境も、コミュニティもいまもその影響を受けている。また、風評被害や、負のイメージなど県民への精神的な負担も続いている。

② 福島県の森林の現状について
福島県県北農林事務所林業課長／ＮＰＯ法人グリーンエネルギーユーザーズの鈴木比良さん

森林内の空間線量率について、民有林約 56 万 ha を対象として、原発から 80km 圏外は 10km メッシュ、原発に比較的近い 80ｋｍ圏内は 4ｋｍメッシュで調査を実施している。なお、過去の調査で一定以上の値を計測した箇所は 1ｋｍメッシュに細分化して調査を実施している。その結果、森林内の空間線量率は年々減少している。

〇0.23μSv/h 未満の区域の増加
42 箇所 12%(H23) → 241 箇所 66%(R1)
〇1.00μSv/h 以上の区域の減少
127 箇所 35%(H23) →1 箇所 0.3%(R1)

という結果になっている。森林内のＣｓの９０％以上が土壌（大部分は０～５cm）に分布。出荷制限については野生のキノコやコシアブラは厳しい状況が続き、フキノトウ、ワラビ、タケノコは出荷制限対象地域が少なくなった。

③ 復興に向けた 10 年間の取り組みと新たなチャレンジ

１．NPO 法人いわきの森に親しむ会 副理事長
松崎和敬さん

震災後の活動の影響としては、いわき市内における野外での活動は原発事故に伴う放射線の問題を心配する者が多く、活動を控える者が多くなった。本会の活動拠点においては震災による影響は殆どなかったが、森づくりに従事していた会員（大半が 60 才以上）の多くが家族による放射線への心配から活動を自粛するようになり、震災前の状態に戻ったのは約半数にとどまった。また、湯ノ岳山荘が全国各地から復興支援に来られたボランティアの方々の拠点となり、多くの方々との交流ができた。そうしたつながりのなかで、津波のよる海岸林再生での協働や、新たな活動として国際ワークキャプを 2016 年以降実施することとなった。

２．ふくしまグリーンフォレスターの会 会長
　平子作麿さん

2001 年 8 月設立の団体である「うつくしま 21 森林づくりネットワーク」（県内各地域で積極的な森林づくり運動を展開することを目的とした団体で、県内の主な森林づくり団体が加盟）が、団体としての活動を 2019 年 4 月に休止した。理由は（1）震災により一時中断した後の活動が、全体的に元気がなくなったこと。放射能の影響を多く受けたところは休止のところもでた。（2）定年延長の影響が大きいと思うが、各地区とも新規参入者が少なくなったことが考えられる。また、県内森林組合の状況としては、原発による放射能の影響を多く受けた双葉地方森林組合の活動を再開できたのは、2020 年 10 月となった、9 年半振り。その間山林は管理されなかったため、マツ枯れが目立ち白くなった。50 年以上の天然のマツもダメになっている。間伐が進まず土砂災害発生のおそれがあるところも多い。2 万 ha のうち作業できるのは約 4%にとどまる。原発から一番遠い広野町を中心に再開。

３．若者たちによる新たなチャレンジ いわき市
　田人町地域おこし協力隊　下條真輝氏

震災以降に、いわき市に地域おこし協力隊としてきた。いわき市での山間部での活動を行っているが、森林や美しい自然はとても魅力的である。ただ、人口減少や高齢化の影響で、耕作放棄地や手入れができていない里山が増加している。新しい切り口でこの自然や森林を生かし、田人町を盛り上げていきたい。現在計画、準備しているのが、田人ワークキャンプビレッジである。拠点をつくり、市内外から若い人たちを呼び込み、里山の利活用や、森林についての学びを深めるプログラムを行っていきたい。地域の人たちと協力して取り組む。

④ まとめ

福島県においてはやはり原発事故の影響が大きく、森林や森づくり活動にも多大な影響を及ぼしていることが分かった。だが、森林内の空間線量調査や、木材の調査など日々たゆまぬ努力が行われていて、そうした人々の力が復興を推し進める力になっていることを実感することができた。また、日常生活においても、震災の影響が今も続いている人たちが数多くいて、生活の再建、コミュニティの再生などに対する支援もこの 10 年途切れることなく行われてきた。こうした人々の暮らしや健康、心の安定を支えることなどこれから森や里山ができることが多くありそうだと話を伺って考えるきっかけとなった。

ディスカッション

＜報告者＞

塚本 竜也（NPO 法人トチギ環境未来基地　代表理事）

岩手プログラム

＜東日本大震災から 10 年 三陸岩手からの新たな挑戦＞

＜話題提供＞
芳賀 正彦（NPO 法人吉里吉里国 代表）
＜トークセッション＞
高橋 幸男（釜石地方森林組合参事）
三木 真冴
（一般社団法人東北・広域森林マネジメント機構）
松永 充信（岩泉フォレストマーケティング）
＜コーディネーター＞
手塚 さや香
（釜石リージョナルコーディネーター協議会）

＜テーマ＞

東日本大震災から 10 年を迎えるにあたり、「全国の集い 2014」に登壇いただいた NPO 法人「吉里吉里国」の芳賀正彦さんより、被災地大槌町や吉里吉里国をめぐる 10 年間について話題提供。

その上で、震災後の三陸地域を拠点に自伐型林業や人材育成、広葉樹の活用といった新しい取り組みを精力的に進める 3 者のディスカッションを通じて、多くの人命を失い苦難を乗り越えてきた三陸地域で、森林や林業にかかわる人たちの志や新しい動きを伝え、遠方からのかかわり方や三陸への移住についての意見交換を行う。

① 発表者の発言趣旨

1. NPO 法人吉里吉里国 芳賀正彦さん

自身は東日本大震災直後、「（故郷の九州に）帰ろう」と考えた情けない男だが、妻の「大槌で生きていきたい」という思いを受け、大槌町や吉里吉里地区の力になりたい、と「復興の薪」づくりから活動をスタートし今日に至る。日本各地から企業研修やボランティアが訪れ、子どもたちのツリークライミングなど森林体験の受入れにも取り組んでいる。震災から 10 年たっても地域には“見えない力”によって立ち上がれない人たちもいる。その人たちの分までがんばっていきたい。

岩手プログラム配信会場

2. 釜石地方森林組合参事 高橋幸男さん

震災で釜石地方森林組合は役職員 5 名が犠牲となり、事務所や森林簿などのデータも流失した。一時は再建を諦めかけたが、組合員や地域住民、全国の企業や個人からの支援を受け、地域貢献を掲げて進んできた。そのつながりの中で人材育成事業「釜石大槌バークレイズ林業スクール」の運営や企業研修の受け入れなど外部との連携にも取り組む。震災から 10 年を経て当組合は元気だというメッセージを発信していくことが生かされた私たちの責任だと思っている。

3. 一般社団法人 東北・広域森林マネジメント機構 三木真冴（みきしんご）さん

復興支援の復興支援活動のために移住し、その活動終了後「地域の復興に必要なのは地域資源を活かした産業だ」と思うに至り林業を学んだ。現在は自伐型林業の普及のための講座の開催と並行して地域の山林の間伐産業などを進めている。岩手の森林資源は多様で木材生産だけでなくキノコや山菜、漆などの林産も盛ん。そういった多様な森林との関わりを通して地域の住民はもちろん移住者の仕事の場も創っていきたい。

４．岩泉フォレストマーケティング
　松永充信さん

面積の 93%を森林が占める岩泉町は、その 6 割が広葉樹という特徴があり、その豊富な森林資源と FSC 森林認証を掛け合わせ全国でも唯一の認証取得の広葉樹の流通に取り組んでいる。町内の林業や木材産業の関係者が一堂に会した広葉樹の勉強会を開始し、そのメンバーを中心に木材流通の拠点を作る構想を進めてきたその矢先、2016 年の台風被害によって構想の一部変更を余儀なくされたが、粘り強く調整を進め、広葉樹の流通に取り組んでいる。

② ディスカッションで印象に残った発言

釜石地方森林組合ではボランティアとの植樹活動を実施しており、岩泉町では地域おこし協力隊制度を利用した移住者が山林内でのトレイルランニングの大会を開催するなど、各地で木材生産だけでなく森林の様々な活用が進んでいることが、ディスカッションを通じて明らかになった。また三木さんも漆や山菜、シイタケやマツタケなど特用林産物にも取り組んでいきたいとのことだった。森林組合、自伐型林業、広葉樹流通、という三者三様のパネリストに集まってもらったが期せずして 3 人から木材生産以外の機能について語られたことが印象に残った。

③ コーディネーターによるまとめ

東日本大震災後、岩手県も毎年のように豪雨災害に見舞われている。森林には、木材以外のものを産出する機能や災害の予防、二酸化炭素固定などさまざまな機能が備わっており、その機能を十分に発揮させるためには間伐などの手入れが必要であることが 3 人の発言から分かったと思う。三陸漁場に近い森林だからこそ海と山とのかかわりを実感できる地域でもあり、高橋さんの発言にあった「森林業」という観点で三陸ならではの林業のあり方や森林とのかかわりを今後も考えたい

④ 報告者の感想

東日本大震災後の 10 年という時間の流れを踏まえて今後の森林や林業というなりわいを考える時間にしたいという意図のもとで企画したが、結果的にはこの 10 年間で災害が多発している現状を踏まえて森林の多面的な機能の発揮のために森林の手入れが必要であり、そのためには所有者や森林のある地域の住民だけでなく都市部の住民にも森林について関心を持ってもらう必要があるというところで意見が一致した。前半の芳賀さんの講演の中での「10 年がたっても立ち上がれない人たちがいる」という発言は、地域で生きてきた人だからこその言葉であり、全国の人たちにもぜひ記憶しておいてもらいたい。

岩手プログラムの出演者

＜報告者＞
手塚　さや香（釜石リージョナルコーディネーター協議会）

テーマ別セッション１

『役立つ！森林と人に関わるデータの面白さと利用のしかた』

＜話題提供＞
赤池 円（私の森.jp 編集長）
石川 初（慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科教授）
高山 範理（国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所上席研究員）
＜コーディネーター＞
矢島 万理
（公益社団法人国土緑化推進機構 政策企画部）

＜テーマ＞

ともすると想いばかりが先行しやすい森林ボランティアの活動も、データの客観性を利用して説明することで、説得力が増し、企業や自治体など他セクターとの対話をしやすくする。

本セッションでは、誰でも使える森林に関するデータの紹介と、利用の方法や表現について、学んでゆく。参加者による面白データの紹介も大歓迎！

① 発表者の発言趣旨、印象に残った発言

１．赤池 円さん

身近なところに使えるデータはたくさんある。森林・林業白書を始め、中央省庁の白書は特集や参考付表のデータで情報をアップデートできる。無料の作画ツールも様々出ている。また、生物多様性センターのデータベースやレッドリスト、地図データ等もオンラインで入手できる。セクターを越えて仲間を募り、新たなカタチを求めて行動するために、これまでの価値観や思い込みを疑い、向き合う勇気をくれる「データ」と仲良くなろう！

２．石川 初さん

SFC の学生と共に徳島県神山町で行った調査について発表。地図データを手がかりにフィールドワークを重ねながら、新しい視点で農村の暮らしのランドスケープを描く。

石川初さんの発表

例えば、身近な素材や道具で暮らしを工夫する技をもつお爺さんたちを「FAB-G」と名付けた。駄写真を撮る（麗しい写真は自分が見たい風景を投影しているだけ）、可能な限り全部記録する（機材も積極的に使う）、見えるものをあらかじめ分類しない（既知の概念に当てはめるだけでなく、新しい概念を創出し統合的に記述・理解する）。

３．高山 範理さん

森の定量的情報の取得と活用方法について発表。森を測る⇒現場の状況･情報を客観的に知る。様々な機器を使い、照度や温熱環境、フィトンチッド、樹高等の計測をすることで、炭素固定量の推定や活動の事前事後の効果が数値としてわかる。

高山範理さんの発表

また、森からの影響を測る⇒客観化して、健康づくり等に活用。スマートウォッチ等手軽に使える機器を使い、血圧、脈拍、自律神経を測ることもできる。楽しみながらデータを利用し、活動にも活かしてもらいたい。

② ディスカッションで印象に残った発言

取ったデータが仮説に合っているのか厳しく見ることも必要だが、データを取るプロセスを楽しむことも、続けていく上では大切な要素。データを取る際、いかに先入観を排除するか。スマホでも GPS データを取ることができるので、気軽に使ってみて、いろいろな人と共有し、データを見つける楽しみも味わってもらいたい。様々な種類のデータから、これは実はこういうことだったんだ！という驚きもあり、そこが面白さでもある。

③ 登壇者からのメッセージ

赤池 円さん：統計データは数多くある。データともっと親しくなっていきましょう。

石川 初さん：今回ご紹介したのは、みなさんの森づくり活動のヒントとツール。大切な 1 次データは現場にあるので、ぜひ色々な手法を使ってもらいたい。

高山 範理さん：統計データのようなマクロデータ、現場で取れるミクロデータ、どちらも大切。スマホにも一見森づくりには関係なさそうでも使えるツールが多くある。森の管理、自分の健康管理にぜひ活用してもらいたい。

④ 報告者の感想

データというと少し難しそう、と思われがちだが、森づくり活動を客観的なデータで「見える化」することは、今後新たなカタチを求めて行動するために必要だ、ということが改めてわかった。使えるデータの豊富さ、そして自分たちでも気軽に、楽しみながらデータが取れるツールも様々ある。既存の活動だけに縛られず、新たな活動を生み出していくきっかけとして、自分の活動フィールドで、地域で、ぜひデータを活用してもらいたい。

＜報告者＞

矢島 万理（公益社団法人国土緑化推進機構 政策企画部）

プログラム実施中（配信会場）

テーマ別セッション２
『世界の森とグリーンリカバリー』

＜話題提供＞
池田 憲昭（Arch joint vision 社代表／ドイツ在住）
倉阪 秀史（千葉大学大学院 社会科学研究院教授）
泊 みゆき（NPO 法人バイオマス産業社会ネットワーク理事長）

＜コーディネーター＞
坂本 有希（フェアウッド・パートナーズ／一般財団法人地球・人間環境フォーラム）

＜テーマ＞
世界的に広がる森に関わる環境保全・エネルギー転換をめぐる動きや、日本国内の地域におけるエネルギー自給の事例などを紹介。世界で議論されているグリーンリカバリーを日本でも実現していくために、森林や木質資源を活用した循環型社会を考えるヒントをディスカッションする。

テーマ別セッション２の出演者

① 発表者の発言趣旨

1. 池田憲昭さん「多機能な森とバイオマス」

木材のカスケード利用の観点から木質バイオマスエネルギーに焦点をあててドイツの森林資源の活用事例を紹介。人口 1,100 万人、面積は九州と同じくらいのドイツ南部のバーデン＝ヴュルテンベルク州では、「1 日当たりの森林訪問者数が 200 万人」に上り、森林が人々の暮らしの一部になっているとのこと。また、森林資源のカスケード利用については、マテリアル利用を「ヒレ肉」に、エネルギー利用を「ホルモン」にたとえて解説いただいたのはわかりやすかった。

2. 倉阪秀史さん「2050 年カーボンニュートラルとバイオマス」

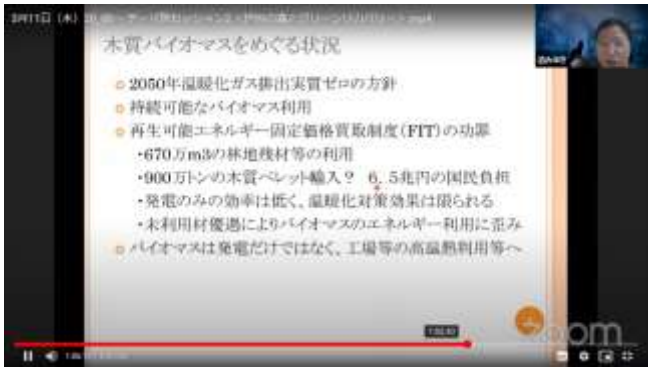
菅総理が 2020 年 10 月に発表した 2050 年カーボンニュートラル宣言でにわかに関心が高まる脱炭素がなぜ必要なのかを解説いただいた上で、倉阪研究室と環境エネルギー政策研究所が 2006 年から毎年試算を実施している「永続地帯調査」を紹介。本調査からは「地域主導の再エネ導入にはメリットが大きいが、再エネ導入ポテンシャルが比較的大きいと考えられる小規模自治体ほど、再エネ政策が導入できていない」ことが明らかになったという。また、今回のセッションのために市町村別のバイオマス発電推計量およびバイオマス熱併給推計量のリストが出されている。詳細データもウェブからアクセスできる。

倉阪さんの発表

3. 泊みゆきさん「森林や木質資源を活用した循環型社会実現に向けて」

バイオマス資源を循環型で利用している国内優良事例として、熊本県小国町、宮城県気仙沼市の八瀬・森の救援隊、北海道白老町の大西林業などを紹介。そして、FIT（再生可能エネルギー固定価格買取制度）によって日本の木質バイオマスの現場にもたらされた功罪があることを解説した上で、

バイオマス利用はカスケード利用を原則として、工場等の産業用に高熱利用すること、熱電併給することの重要性などについて提言があった。



泊みゆきさんの発表

② ディスカッションについて

今回のディスカッションでは森林資源の利用はカスケード利用が重要である点が再確認できた。その上で、「森林バイオマスを用いた地域活性化は可能か？」という点について、泊さんは「不可能ではないが、簡単ではない」と発言した。木質バイオマス利用ではエネルギー利用が最も価値が低いものであるという点を踏まえて、燃料利用に偏らずに、地域の状況によって柔軟に考える必要があるという指摘が印象に残った。これは、池田さんが紹介いただいたドイツの事例からも、倉阪さんが解説いただいた脱炭素に向けた取り組みの視点からも、多くの示唆があった。

③　報告者の感想

今回のセッションは、世界で議論されているグリーンリカバリーを日本でも実現していくために、森林や木質資源を活用した循環型社会を考えるヒントをディスカッションしたい、というかなり大きなテーマ設定をした。グリーンリカバリーは、新型コロナウイルスによる経済ダメージからの復興を、単に元の経済システムに戻るのではなく、脱炭素で循環型の社会を目指すための投資で経済を復興しようという考え方である。欧米で先行して進んでいる取り組みではあるが、森林問題との接点も大きいテーマである。今回のセッションでは議論できたことは限られていたかと思うが、今後の集いの中でも継続的に取り上げていくべきテーマではないかと感じた。

＜報告者＞
坂本 有希（フェアウッド・パートナーズ／一般財団法人地球・人間環境フォーラム）

テーマ別セッション３
『オンライン・リアル双方を活かした森との関わり方』

＜話題提供＞
上田 融（NPO 法人いぶり自然学校 代表）
くまつ しんすけ（くまつ環境教育事務所 代表）
遠藤 隼（サシバの里自然学校 校長）
＜コーディネーター＞
水谷 伸吉（一般社団法人 more trees 事務局長）

＜テーマ＞
コロナ以降、森と関わる方法としてオンラインの活用が期待される。本プログラムでは森にいない時でも、森に触れることができるサービスや手法を取り入れるアイデアを紹介。加えてワーケーションなど都会からの分散型の触れ合い方なども議論する。オンラインツールとリアルなフィールドの相互の良さを活かした新しい森との関わりを考える。

① 発表者の発言趣旨、印象に残った発言

１. NPO 法人いぶり自然学校 上田融さん

北海道の「イコロの森」という施設を利用したワーケーション事例を発表。イコロの森は、当初より子どもの自然体験をメインにした、体験学習の研修施設である。新型コロナの影響により、特定少数にターゲットを絞って展開することとなり、特に家族での宿泊体験を提供するようになったことをきっかけに、ワーケーションがはじまった。現在の施設を LIVE で案内していただいたが、北海道ならではの雪の様子から馬が飼育されている様子、サウナも拝見することができた。

家族旅行を兼ねて仕事をする親、社内研修などで利用する企業など、施設をとりまく環境や設備が仕事のストレスからのリフレッシュを提供されている。またこれまでの実績からも、子どもたちの生活面での成長が見られ、デスクワークだけではない作業やコミュニケーションの促進にも、ワーケーションは有用であることが伺えた。

特にワーケーションを行う場所は「里山」のほうがよいということにポイントがあった。里山だからこそ、ワーケーションを単純なワークとバケーションの足し算だけでなく、生活のための活動が加わり、また「非日常から学び」を得られるというのがイコロの森で行っているワーケーションの醍醐味と言える。そうした活動が、里山の整備や利用にもつながり、ワーケーションが進めば進むほど、森がよくなっていく。そんな循環を生み出せる事業にしていきたい。

上田融さんの発表

２. サシバの里自然学校 遠藤隼さん

サシバの里自然学校で行ってきたオンラインでの自然観察会の様子について。当日は残念ながら雨天だったこともあり、晴れた日に撮影しておいた動画でオンライン観察会の様子を見ながらの解説となった。新型コロナ感染拡大により、対面での観察会が難しいことからはじめたオンライン観察会は、春、森としてとてもいいシーズンに子どもたちが森を感じることができないことはもったいない、という思いがきっかけとなった。成果としては、アーカイブされた動画の再生数も多く、リアルでは限られた人数の方にしか伝えらないことが、オンラインになることで多くの方に、少なくとも見てもらえることができたという点がある。ただ、インタープリターとしてはあくまで LIVE に

こだわっている。YouTube だと動画編集に大きな手間がかかるが、LIVE 配信にすることで双方向性を大事にしている。

オンラインのメリットとしては、①普段では参加できない遠方の方や障碍のある方も参加できること、②時間を選ばないこと（録画での対応）、③双方向のやりとりもできる、そして、④細部の観察がやりやすい。ということをやってみて感じている。一方でデメリット・課題もあり、①有料化が難しい、②人手がいる、③夜は難しい、④通信回線、機材などの配信環境整備といった点である。

自然観察はあくまでリアルが基本。オンラインでは自然体験を心にとめためのスパイス的なものとして今後も活用していきたい。

４．くまつ環境教育事務所 くまつしんすけさん

遠藤さんと同じくインタープリターとして自然観察を行っている。今回はオンライン配信の裏方としての話題を提供。遠藤氏が自然観察の配信をどのようにやっていたのか、第三者的な視点でわかりやすく解説し、有用な機材の紹介もあった。

画質はスマートフォンでも十分な画質であること、手振れを防ぐためのジンバル（スタビライザー）を利用していること、そして、音声が大事で、内臓マイクよりもピンマイクにすることでクリアな音声となる。機材のデメリットは、いいものをやろうとするとコストも大きくなってしまうこと。自分がやりたいことを明確にして的確に判断していくことも必要である。

オンライン配信を自分でやることのメリットは、自分が伝えたいことをダイレクトに届けられることにある。

オンラインは、テレビにできないことを届けられることが一番のメリットと話した。

② ディスカッションで印象に残った発言

オンラインでの観察会は、実際に参加してみると、想像していたよりも現場の感覚を感じること

遠藤隼さん、くまつしんすけさんの発表

ができる雰囲気もあった。また、郵便等で実物を視聴者の手元に置くなどの工夫をすることで、よりオンラインとリアルを結ぶことができるのではないか、というアイデアもでていたのが印象的である。

今回話題提供していただいた出演者も、コロナに入る前はこうした配信のノウハウはなかったという。やりながら、失敗しながら工夫をしている。デジタルが得意な人じゃなくてもできる。できることからやってみることが大事であることがうかがえた。

③ 報告者の感想

コロナ禍だからこそ、オンライン化が進み、それをチャンスだととらえて、さまざまなチャレンジをしていることがよくわかった。こうした取り組みが、全国的にも底上げされていけば、より一般の方と森・自然の距離感を埋めることができるのではと感じた。一方で、オンライン化が進めば進むほど、リアルに対する大切さを感じることができるのではないかと思う。

また本プログラム終了後は、Ricoh THETA による、360 度の LIVE 配信ストリーミングの体験も行った。

＜報告者＞

後藤 洋一（NPO 法人樹木・環境ネットワーク協会 事務局長）

クロージングプログラム

『「森林と市民を結ぶ」新たなカタチを求めて～地域と森とのつながり方・関わり方を探る～』

<パネリスト>
中安 祐太（合同会社 百（MoMo）／東北大学 学際科学フロンティア研究所 助教）
松崎 和敬
（NPO 法人いわきの森に親しむ会 副理事長）
下條 真輝（NPO 法人いわきの森に親しむ会／いわき市田人町地域おこし協力隊）
手塚 さや香（釜石リージョナルコーディネーター協議会（釜援隊））
矢島 万理（公益社団法人 国土緑化推進機構 政策企画部）
坂本 有希（フェアウッド・パートナーズ／一般財団法人 地球・人間環境フォーラム）
星野 晃一郎（株式会社 ダンクソフト 代表取締役）
<コーディネーター>
鹿住 貴之（副実行委員長、認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK 理事・事務局長）
<コメンテーター>
内山 節（実行委員長、哲学者／NPO 法人森づくりフォーラム代表理事）

配信会場（ダンクソフト株式会社）

① パネルディスカッション 「東日本大震災からの 10 年間の振り返りと今後に向けて」

1．中安 祐太さん

被災したのは仙台の学生時代で、様々なボランティア活動やがれき撤去のアルバイトを通して、社会問題は技術だけでは解決しないと思った。また、原発と化石燃料にたよる社会はまずいと感じていた中で、100 年後に食料とエネルギーの地域自給率 100％を掲げる、NPO 法人川崎町の資源をいかす会と出会う。現在は、合同会社 百の活動を行いながら、大学では、エネルギーデバイスに木質材料を活かす研究を続けている。新しい感覚も常に入れながら、サスティナビリティを考えていきたい。

2．松崎 和敬さん

福島の会津、浜通り南部は、今回の集いの事例などを参考にできるが、中通り、浜通り北部は原発の影響で、何十年と難しいだろう。原発の事故がこんなに大変だとは思わなかった。今回あらためてそう思った。中通りは、当時の風向きの関係で影響を受け、気持ちも含めて落ち込んでいる。震災前に比べて外遊びができない。特に、中通りは低下している。しかし、落ち込んでばかりいられないので、少しでも元気になれればよいと思って、活動を続けたい。

3．手塚 さや香さん

発災の翌月から隔月で釜石にボランティアで通い、3 年後に住み始めた。10 年の間には、ハード面の復旧・復興が進められる中で、台風や 2017 年の国内最大規模の山火事など大規模災害が何度もあった。災害が定常化してしまう危機感を持っている。被害を最小限にして、どう地域を守るかを考えてきた。三陸は、漁業・水産業の低迷が大きい。気候変動に対して微力ではあっても何とか軽減することを森林・林業を通して貢献できればと思っている。

４．内山 節さん

復興は、いろんな活動を復活させていくことでしかない。元に戻すことでもあり、新しい形もある。その時に原発問題は大きい。自然と人間の関係を作ろうにも作れない。いつも考えていかなければならない。人々のいろんな試みが集積されてこそ、社会が復興する。人々や自然と寄り添うような、手触り感のあるような関係が軸にならなければならない。そういう活動を支援するために本来は制度が必要だ。防潮堤を造れば復興、という話では全くないと思う。

② パネルディスカッション「これまでの振り返りと新たなカタチに向けて」

１．矢島 万理さん

国土緑化推進機構では、森林ボランティアにお金の面での支援をしてきたが、高齢化の問題など課題は変わっていない。森林サービス産業という新しい取り組みを始めた。若い人や無関心層に森のよさを分かって来てもらうためには、産業として地域にお金が回る仕組みが必要だと考えている。森林空間を教育、健康、観光などで活かしたい。メンタルヘルスの面でも森に来ると効果があるというデータも出てきており、このような森林と市民の関係性も進めたい。

２．坂本 有希さん

震災もコロナも、自分のような東京にいる者にとっても、暮らしやそれを支えているものについて考えさせられるきっかけとなった。例えば、東京のエネルギーは福島の原発から来ている。自分の足下を振り返り、サスティナビリティについて考える人が、日本、そして、世界中に増えた。コロナの１年の中でも非常によく言われている。その中で、国土の７割が森林の日本では、デジタル・オンラインの可能性も含めると、すごくポテンシャルがあると思う。

３．星野晃一郎さん

ダンクソフトは創業 38 年。震災までは山手線の中が商圏だったが、代替地を求めて徳島県神山町と出会う。その３年前に林業関係者とのつながりで、伊豆高原の別荘を買い取り、今で言うワーケーションを地元の NPO とやっていた。通信速度がここ数十年で 100 万倍から１億倍になっている。国の政策としては、5G を５キロメッシュで覆うそうで、360° カメラを森の中で自由に使える時代になる。地域に残りたい若者も多く、東京一極集中から分散すれば、社会は相当変わる。

４．中安 祐太さん

安全面にテクノロジーを活かせるのではないか。遠隔で木の伐倒を行う、3D スキャンで広葉樹の密度を調べて伐採に活かす、土砂災害や山火事などを事前のモニタリングによって防ぐ。山を楽しむ視点では、VR（Virtual Reality／仮想現実）で、里山の昔の姿や理想の姿を比較できるようにする、植物の葉を画像認識するアプリのように木の樹皮を認識できるアプリを開発する、普段は入れない樹海などでのサバイバルゲームをオンライン上で行えるようにすることなどが考えられる。

５．松崎 和敬さん

テーマ別セッション３で、スマホでかなり細かい撮影ができることを教えていただいた。自然体験を撮影して、来た方に見ていただくというように活用したいと思う。

自分達の活動は年配者が多く平日中心に行っているが、若い人の参加を求めるとなると土日も含めて活動をすることが必要だと感じた。いろいろと活動の幅を広げようと考えている。

６．手塚 さや香さん

考え方として二つ軸がある。コロナが落ち着いて実際に足を運んでもらうということとリモート

という軸。もう一つは、レクリエーションやレジャーで地域に関わるのか、仕事のスキルを活かして関わるのかという軸。例えば、釜石の森林組合は間伐作業の効率化は全国一だが、流通はサプライチェーンが長く、効率化が難しい。そういうシステムの改良にリモートで関わることはできるかもしれない。実際に来てもらうということでは、植林、その後の下刈りなど山づくりに遠方から関わってもらうことを続けていきたい。

多くの日本の地域同様、三陸は海と山があるからこそ産業が成り立っている地域で、そういう暮らしを実感してもらえる体験ができる。今、副業、リモートワークで三陸に住んで東京の仕事を受けることもできる時代なので、いろんな方とつながっていきたい。

7．下條 真輝さん

地域に住んでいて思うが、地域を守ろうとしている方は高齢化していて、次の担い手にどうつないでいけばよいのかをすごく考えている。一方、若い人が森や地域に関わろうと思うきっかけは何だろうかと考えている。今後は、共同生活、田舎体験暮らしのようなところから森を知ってもらう活動を進めようと思っている。そのきっかけをどう作っていけばよいかを考えているが、地域の人が望む森林の形が継続性を生むと思い、活動している。

③ コメンテーター（内山節さん）によるまとめ

いろんなものがあってよい。林業も山の暮らしも、若い人に入ってもらい、今までにない形を作ることも大事。同時に残っている人たちが森で暮らすことに誇りを持っていることも、両面あってこそ本当に力のある地域ができる。技術も、新しい技術によって開かれるものもあるが、昔からの技や知恵が生きているが故に魅力的なものもある。両方をどううまく蓄積させていくのかが大事だろう。今後も災害が起きると思うが、森の力だけで全ての災害を止めることはできない。森に不可能な期待をするのではなく、森とともに暮らしながら自然と共生する社会のあり方を、絶えず見つめ直すことができれば、とてもよいと思う。

④ コーディネーター(鹿住 貴之さん)の感想

今回の集いの実行委員会は、実は一度も対面では集まらなかった。逆に、オンラインだからこそ、月 1 回の頻度で、東北と東京のメンバーで一緒に会議ができたと言えるかもしれない。しかし、本番の蓋を開けてみるまでは、これだけの価値ある議論ができた成果について、自信を持つことはできなかった。

集いが始まってからの 25 年間で、社会の状況、森林ボランティアを取り巻く環境も大きく変わった。森林と市民を結ぶあり方について模索し続けているが、間違いなく言えることは、今回「新たなカタチ」を創造できたことだ。

オンラインでつながったことを、リアルに活かす。森林というリアルには、それがふさわしいのではないかと感じている。

＜報告者＞

鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON(樹恩) NETWORK 理事・事務局長）

出演者・配信スタッフ

参加者アンケート

＜参加人数＞

日程	プログラム	視聴者最大人数 出演者含む	視聴者最大人数 （出演者以外）
3 月 7 日	オンラインサポート	47	42
3 月 7 日	オープニング	191	179
3 月 8 日	宮城プログラム	101	110
3 月 9 日	テーマ別 1	72	61
3 月 10 日	福島プログラム	83	73
3 月 11 日	テーマ別 2	60	47
3 月 12 日	岩手プログラム	73	62
3 月 13 日	テーマ別 3	41	29
3 月 14 日	クロージング	71	58
	合計	739	661

＜申込数＞

種別	金額	申込み人数
無料（OP,CL,東北プログラム）	無料	305 人
学割	無料	53 人
早割り（全参加）	2,000 円	61 人
全プログラム通し参加	2,500 円	20 人
テーマ別単発	1,000 円	20 人
応援・協賛参加	5,000 円	12 人
合計	225,976 円（手数料除く）	459 人

＜参加者の居住地域＞

地域	人数
北海道	13
東北	66
関東（東京を除く）	108
東京	121
中部	61
近畿	56
中国	13
四国	10
九州	16

＜所属など＞

所属区分	人数
NPO/森づくり団体等	28
企業	46
行政機関	13
高校	5
大学	66
マスコミ	4
その他	28

＜森林と市民を結ぶ全国の集いを知った媒体＞

媒体	人数
Peatix	35
SNS（Facebook・Twitter など）	216
WEB サイト	26
メールマガジン	84
知人の紹介	94
その他	14

＜プログラムの満足度＞

満足度	人数
5	91
4	40
3	13
2	4
1	4

＜自由記述・感想＞

◇3/7（日）オンライン参加サポートプログラム＜オンラインイベントにチャレンジ！＞

慣れるしかないのだということが分かりました。後、映像ばかり気にしていましたが、音声が大事なことを再認識しました。

見やすく聞きやすいプログラムでした。

森は作り直せる。自分たちがどう言う未来を作りたいのか言語化する。科学的に問題解決していく。経済的に回る仕組みにする。若い力を呼び込む。ただのナチュラリストでは駄目。森には多様性が必要。森の価値は木材販売では無い。防災難点から森づくりを定義していく。森や林は 100 ミリ以上の雨は吸収できない。

オンライン初心者にはとてもよかった。

◇3/7（日）オープニング 基調講演

最高でした！未来は創るもの。答えはない。

安宅さんの学問を子供から大人までさまざまに学べたらいいのになと思いました。

益々パワフルな安宅さんの講演、楽しかったです。ありがとうございました。

安宅さんがとてもやさしいこころの持ち主であることがわかった。とても面白い話ありがとうございます。

大胆な切り口からのお話しを聴けました。未来へ何を残すか！今日より、明日の進化。一歩ずつ進むよう心がけます。

盛り沢山の情報に追いつくのが難しかったですが、刺激になりました。絶望せずにできることをコツコツと、が大事ですね。

森と田園、とにかく大事！　力説いただいたことが大きな力になります！ぜひ、本を！！

データを活用するループが必要。中長期的な視点、デジタル化と持続可能化を踏まえた未来を考え、創っていくことが必要。

ナイーブな森 lover にグーパンチで、とてもよい方を呼んでいただいたと思います。

基調講演はたいへんに刺激的な内容でした。森に対しての大きな意味での「why」をみんなで考えていくときですね。

お話が非常に面白い！行動を起こしても 200 年、日本中で行動を起こせば、もう少し変化が早く起こるかもと期待できた。

データを持ち出して、日本の森の現在過去未来を説明してくださり大変勉強になりました。未来は目指すものでありつくるもの、という強いメッセージを受け取りました。

私は林業にかかわっているわけでもなく、仕事も全く関係ないのですが、一消費者として何かできることをしていきたいと思いました。

技術的に出来るのだから、課題整理が大切。ただやりたい課題をするのではなく未来に続く課題を作るのが大切。

日本列島の全体に渡って中央に山脈がある日本国土は世界の宝と思います。大企業の収益は伸びてないものの、まだ大きいので社内コミュニティ仲間と貢献施策を考えます。

安宅先生の「森だけの話ではだめ」という生態系、総合的な視点からの問題の捉え方と手段、の考え方は画期的であり、それらに基づいて危機意識による、未来をつくる森づくりや活動が必要であることを学んだ。

データ等をもとに、現在の課題の説明を聞き、自分が思っていたより深刻で、かつ現在進行のもの

なのだと強く感じました。森を見るにしても木だけを見ていてはいけない、課題解決には様々な視点から考えなければならないということが印象に残りました。今日の講演を聞き、自分はまだまだ知らないことが多すぎると感じました。課題の解決やそれ以前に課題の発見に必要な知識をつけなくてはならず、それをする中で今日の自分にできることやるべきことは何なのかを考えていこうと思いました。

近く、林業の現場に携わりたいと考えています。しかし、森林について、環境について、人間社会についての知識が不足した状態のままでいては、せっかく森林直接的に向き合う林業界に飛び込んだとしても、これからの地球に貢献するような目標・目的を持って働くことが出来ません。今回、安宅さんの話を聞いて、自分自身、知識不足であることを痛感しました。今日聞いて知ったことを基に、まずは自分がどうしたいのか、そして、その自分がどのように地球環境に貢献できるのかを考えたいと思います。このように自分の考えをある程度整理したうえで、社会の全体像を見渡していけたらと思っています。

未来の方程式。経済を回すということ自体が資本主義を起点とした発想だと思いますが、それで安宅さんのおっしゃる抜本的な改革が可能なのかという疑問が浮かびました。とはいえマルクスに戻るのも現実的とは思えないのも事実です。何か第三の道が必要だと感じます。方程式の一要素としてテクノロジーの活用がありましたが、既存の発想が抜けないと新たな問題を引き起こすだけのように思います。安宅さんのお話は非常に面白く引き込まれましたが、データドリブンな思考（科学的思考）が現状の問題を生み出してきたのかもしれないという懐疑心もキープしておくべきだと感じました。

安宅さんの示唆に富むお話に圧倒されました

森林と市民を結ぶ集いに参加するのは 2 回目ですが、今回も普段目を向けていなかった分野からの話をお聞きして、視野が広がるとともに、自分の興味関心の狭さも反省させられました。大学・大学院時代に森林科学を学んだ当時感じたのは、日本のこの分野の研究や技術の発展の遅さや、林業中心の考えが根強いことや、多様な機能についてそれぞれ研究はされているものの横断的な知見がえられていないということでした。現在、宮城県で活動していますが、沿岸部では森里海のつながりを考えていらっしゃる人がいるものの、それらのつながりについて、安宅さんのお話にもあったかと思いますが、研究の蓄積がまだあまりがない印象を受けていました。今回安宅さんのデータを基にした指摘や予測をいくつかお聞きして、そのあたりを考えなおし、大きな視点を持つためのヒントを得ました。木だけでなく土や水・海、集落・田園なども含めた系を念頭に置いて、その循環を理解していくこと、そのうえで新たなシステムを作っていくこと。大きなスケールの話ですが、私も何かできることからしてみたいと思いました。安宅さんや小野さんの風の谷プロジェクトの動向も今後参考にしていきたいと思います。宮城県内で活動をしていますので、明日のプログラムも楽しみにしております。本日の基調講演、ありがとうございました。

木は森の 1/3、はげ山を森にしてきた、森と田園の風景、系で考える、未来を作れる場所に才能は集まる、次世代に何を残して死ぬか、200 年先を見据え動く…なにをすればいいですか？の問いは、医者に出された薬を飲めば治ると、答えを誰かに委ねている。午後眠かったのが目が覚めました。最近「シン・ニホン」と平行して「土と内蔵」「植物と叡智の守り人」を読み始めたところで、明日登壇される清和研二先生のご著書もこれから読むつもりで、何かを切り離さない、私も切り離されない、大きな共存のようなものを思い描いていま

した。オンラインでなければ参加できませんでしたので、機会をいただけて本当にありがたいです。

とても面白かったです。コロナで脱過密化（過疎化）、田園と森林をセットで考えた空間計画、生物多様性を実現する森林計画など、大規模かつデータを活用するとドラスティックに変えられることが多くてわくわくしました。

今地球に暮らす一人一人が自然の生態系について知り、やらなくてはならないことをすぐに実行して欲しいという呼びかけは心にささりました。

安宅先生のお話は素晴らしかった。目を見開かされた。社会を変革する一因子として、ゲリラ戦に勤しみたい。

安宅さんの未来の方程式には大いに刺激を受けました。データやテクノロジーをいかに活用するかは、ことの善悪を問わず必要なことと感じました。が、これまでと同じ発想だと科学と言われる概念が、地球に与えたインパクトと同様の結果をもたらすと思い怖いです。科学者、技術者の浪漫に同調する気にはなれません。内山さんのお話をもう少しお聞きしたかったです。小野さんは、声のトーン、雰囲気、進行のしかたがとても心地よく、内容がすんなり入ってきました。

◇3/8（月）宮城プログラム＜里山・森林の利活用の意義と利用法の実践＞

林業の６次化について、林業家だけでなく大工の方など協力することに可能性を感じました。

森林の生態系の仕組みを見るときの、視野の広さに感じ入りました。

新しい森林との関わり方や持続させていく方法、実際に現場で活動されている方たちのお話を聞くことができてとても勉強になりました。ありがとうございました。

菌類、病原菌のお話が面白かったです

森林のあり方と、具体的な方策について、様々な取り組みを知ることができて良かったです。また、清和先生のお話や百の活動の話については何度か伺ったことがありますが、このプログラムは、多くの人々に公開し、広めていく良い活動だと思いました。今後もこのような活動をどんどん行ってほしいです。

安宅先生のお話が先にあったことで、それぞれ違う立場からのお話のつながり方、東北の森と暮らしに閉じずに、未来へ続いていることに、意識を向けて聞けました。具体的で、リノベや庭づくりに活かせそうな内容で面白かったです。

清和先生の多種共存の森づくり、佐藤さんの炭の暮らし、大変勉強になりました（森林の素人なので格別）。

普段木工をしていますが、林業や森林については知らない、わからないことが多いので、大変興味深く拝聴いたしました。自身の製作では、国産広葉樹を使うことが多く、魅力も感じています。有賀さんのお話に共感しつつ、もっと木を活かすことや一般の人に良さを伝えるができたらと、自分の課題にも感じました。大工さん達と違い、木を使う量もペースも余りに微々たるものですが。極々小規模なりにできることを考えたいと思います。多様な樹種が混在している森林が強いというお話は、人間でも遺伝子的に遠いもの同士が交わることで強い個体が生まれることや、得意不得意をもつそれぞれが、力を補い合う社会のようでおもしろいなと感じました。

清和先生のお話を聞いて、多種多様な樹木からなる森林が重要であることを理解することができました。私自身広葉樹の森には興味があり、岩手県岩泉町が行う広葉樹の森づくりに注目しています。やはり岩泉でも、必要以上に手入れをしない、ということを意識した森づくりを行っており、先生

の話の通りだなと感じました。佐藤光夫さん・円さんによる炭の話では、炭の可能性の大きさを知ることが出来ました。炭と言えば、消臭効果やご飯を炊くなどしか使い道がないのではないかと思っていましたが、料理やアートにも活用していることを知り驚きました。料理やアートなどの多くの人に興味を持ってもらえるようなものと炭を結びつけて魅力を発信する、炭に限らずこのような動きは活発になっていると感じますが、私たち若い世代から広げていかなければならないと感じました。このことに関連して、伊藤さんの「大工が山主になり、伐採・製材・建築を一貫して行う 6 次化モデル」のような今までにないプロジェクトについても、まずは知ってもらうための広報活動が重要だと感じました。

伊藤さんのお話を聞いて、これまでピンと来なかった山を維持していくことや林業経営の厳しさ・難しさが少し分かった気がする。一市民は何ができるだろうかと考えさせられた。

私自身が宮城県内で活動しているので、同じ県内での面白い取り組みを知れてよかったです。清和先生、すみやのくらしの佐藤夫妻、伊藤建築の伊藤さん、百の朏さん、皆さんに一度お会いして、何か一緒にできたらいいなと思いました。

ジャンゼンコンネル仮説や菌根菌など、また佐藤ご夫妻の炭への多方面への挑戦など貴重な情報が拝聴できて大変刺激になりました。

◇3/10（水）福島プログラム＜復興に向けた 10 年間の取り組みと新たなチャレンジ＞

福島県内の森林手入れ状況に興味を持っていたのですが、実際に作業をされている方のお話が聞けてよかったです。

下條さんのような若者、よそ者が田舎の閉塞感を打破してくれると思います。応援しています。

放射線の影響により出荷や立ち入り等に制限があることへのザックリとした理解はありましたが現地での生産物の種類、品目、部分による放射線検出量の変化がありという点に関してとても興味深く 10 年たったいま知った事実でした。とても勉強になりました。

震災、原発事故を経てのご苦労がよくわかりました。土壌の線量など、丁寧に調査されているんだなぁと感じました。

震災から 10 年経った福島の現状がわかった。

原発被災地の今の状況や課題がわかりやすく勉強になりました。

福島の森林の現状が地域で活動する皆様の発表を通してよく分かりました。

原発事故が森林に与えた影響（山林の伐採等手入れができない、屋外の活動を控える等）実情や、福島の人は避難している人も県内に生活している人も何かしらの悩みを持っていることがわかりました。広域避難者支援に関わっていますが、皆さん福島に戻るか戻らないかで悩まれているし、戻った人と戻らない人の間の人間関係が壊れたり、もともと住民でなかった人が自分が住んでいた町に入ることへの抵抗感など、いろんな話を聞いてきました。今日のプログラムに参加して、放射能で汚染されてしまった身近な地域のために福島に暮らして様々な活動をしている方がどのような気持ちでいらっしゃるのか、じっくり伺ってみたいと思いました。

震災、原発事故を経てのご苦労がよくわかりました。土壌の線量など、丁寧に調査されているんだなぁと感じました。

福島や東北の復興は、決して忘れてはいけないと、改めて思いました。

まだ福島は森林どころではないのがよくわかりました

◇3/12（金）岩手プログラム＜東日本大震災から 10 年 三陸岩手からの新たな挑戦＞

FSC 森林認証の元で広葉樹の活用に取り組んでいる岩泉町はもっと認知されていいと思います。

吉里吉里人の活動感動です。もっと知りたいです。

森林の価値について。私は「林業の 7 次産業化」の必要性を強調してきましたので、今日の議論は、そうした流れだと感じました。

広葉樹利用について具体的な取組みをお聞きでき参考になりました。原木シイタケ栽培農家ですので、それを通して山林活用を実施していきたいと思います。

自伐型林業という単語を今回の集いから知って、自分のなかで少しずつ輪郭が形作られてきている。機会があればどのような形態のものなのか、体験もしてみたい。

東北での森づくりには希望があると感じることができました。

岩泉町の FSC と広葉樹を活用した取り組みが印象的だった。

市民、森林所有者との関わり方がどのようになっているのかが分かれば、なお良かったと思います。

立ち上がれない、立ち上がろうとしない者を非難することは、許されぬと思うのです。見えぬ力に救われた立ち上がれる者が、立ち上がれない者の分まで働く…だったでしょうか、しんしんと、染みました。

今回のプログラムは、"地域のための山林活用”というのがテーマに感じられました。釜石や岩泉、東北地方それぞれの地域の実情に合わせた山林活用が行われていることが理解できました。話の中でも特に、吉里吉里国理事長の芳賀さんの「地域は地域の大人たちが作る」「立ち上がれない人たちの分まで立ち上がれる人たちで町をつくっていく」という言葉が印象に残りました。これからは、自分の一番身近な存在である”地域”にもっと目を向けていく必要があると改めて考えました。昨今の地球温暖化を例にしても、まずは地域の実態を知ること、それが分からないまま世界の地球温暖化を考えても、どこか空洞化してしまう気がします。地域という部分を変えつつ、日本・世界という全体のことを森林活用から考えたいです。

吉里吉里国、芳賀さんの語り口と一語一語が沁みました。

手塚さんのコーディネートが良かった。

芳賀さんの言葉の重さにリアリティを感じました。

◇3/9（火）テーマ別セッション 1＜役立つ！森林と人に関わるデータの面白さと利用のしかた＞

上山町のお話、ネーミングセンス最高。

データの役割と必要性、スマートフォンの沢山の機能を生かす

石川先生と研究室の学生らのフィールドで発見したものにつける名前がとてもチャーミングでした。

万歩計位しか実践してなかった。いくつか試してみたいことがあった。

学校でデータを扱う際、扱いや読み取りが難しいものだと感じていましたが、今回のお話を聞いてデータはとても身近で自分や周囲を楽しみながら客観的に見ることができるものだということを知り、印象が変わりました。先生たちもとても楽しそうでお話に引き込まれました！ありがとうございました。

データ情報の使い方、神山町の“地元学”、森をはかる計測手法など、素人として初めて知ることばかりで、森に親しむ方法として大変参考になった。

森林を訪れて考察するという従来の考え方に、データやアプリを使うことで、近年問われ続けた森林の危機という考え方から、楽しみながら自分の健康との因果関係を明確に数値化して、このやり方は多くの人が森林に興味を持つ可能性があるなと。楽しかった。

見てみたい、活用してみたいデータやサイトがたくさんありました。意外とスマホには活用しやすいデータアプリが多くあるようなので、できるところから利用してみたいと思います。今回のお話の中で最も印象に残ったことは、石川先生の「美しいだけの写真ではなく、駄写真を撮る」ということです。はっとしました。写真をいかに美しく・見やすく撮るかばかりに気を取られていました。駄写真は自分が気づけなかった視点を示してくれる無駄ではない貴重なデータであることがわかりました。この駄写真を、今回知った様々なデータ情報サイトや白書を使って分析してみたらまた新たな発見がありそうです。

データがどこにあるかから、何をデータとするかの楽しみ方まで紹介してもらえた

魅力的な神山町のお話から、データを用いることの意義、活用できるサイト・道具などたくさん見ることができてワクワクしました。

赤池さんのデータ作成に便利なツール紹介、井上先生の神山の個性的な調査など、内容が非常に面白かったです。惜しむらくは、開始時間の問題もあるでしょうけれど、2 時間あると良かった。

◇3/11（木）テーマ別セッション 2＜世界の森とグリーンリカバリー＞

倉阪氏のバイオマス熱供給上位自治体のデータ。

ドイツと日本とを比べると、日本の現状をより理解することができました。課題はあるものの、可能性を感じました。ありがとうございました。

情報満載で大変参考になりました

ドイツでは、薪ストーブの利用が危険であるとの認識が示されていることに驚きました。

バイオマスの現状、課題、問題などについて多面的（グローバル）に理解が深まりました。原木椎茸栽培（一部：薪販売）を通して広葉樹利用をしていますので、今後の経営に参考になることがたくさんありました。ありがとうございました。

恒続森・CO2 ダイエット・活用する森林・バイオマスの熱利用。これらのワードが頭に残りました。このワードを中心に今回のセッションを整理したいと思います。

日本と海外での考え方、取り組み価格の違いが内容にあり比較された考え方から学ぶことができました。

ドイツの林業と人々の暮らしが道でつながっていること、感動です。

森に関する活動をしていない一市民です。カスケード、地元の杉をリフォームに使ったり、猫のトイレ砂に日本の森の間伐材の木質ペレットを選ぼうという意識はありましたが、バイオマスはぼんやりとしか知りませんでした。資料を眺め直してみようと思います。

「世界で議論されているグリーンリカバリーを日本でも実現していく～ディスカッション」になっていたのでしょうか？　そこを期待していたのですが。

◇3/13（土）テーマ別セッション 3＜オンライン・リアル双方を活かした森との関わり方＞

オンラインでの自然観察会の裏側をみせていただき、ノウハウを知ることができたのが良かったです。またイコロの森がどんな場所なのかを案内し

ていただき、ユースファームという展望もお聞きして、非常に興味を持ちました。

◇全体を通じて

来年の開催もオンラインを含めた方法での開催にしてください。

分科会と全体があって、それぞれな地域性も知ることができよかった。

オンラインならではの利点はありましたが、さすがに 8 日間通しはヘビーな気もしました。

開催日数が長いと見そびれてしまうので、 2 日に数講座をまとめてほしい。

この種の森林の利活用などの先進事例や先駆的な取り組みなどを共有できるネットフォーラムは田舎にいる者にとって貴重な情報を得る場です。今後も継続してほしい。

とても興味深い内容でした。

内容満載でよかったです。毎回の zoom アドレスご案内もいただきよかったです。できればプログラムのリンクも一緒にいただけたらすぐ内容が確認でき、なおありがたかったです。

プログラムが別々の日時に開催されることで、興味のあるものにすべて参加することができたのがよかった。以前のような会場形式では同じ時間帯に開催されるため、こうはできなかった。また動画もあるため、他のイベントとも調整しやすく、あとから復習もできてよい。オンラインのため、自宅から参加できたのもよかった。テーマについても今年ならではのものばかりで、知りたかった情報も多く、とても勉強になりました。ウェビナー形式だったため、登壇者や他の参加者と交流できなかったのは残念ですが、今後コロナが収まったら、各地へ足を伸ばすそうと思います。

オンラインになったことに参加の門戸が広がったけれど、やはり森林イベントはあまりなじまないと感じた。ただ、今後は併用が基本となるべきだろうと思う。

池田憲昭さんの説明されたドイツのように、森林を様々に保全活用することが気候危機や生物多様性、地域づくりに役立つという大義名分をもって、日本の政策の重点となるよう、間に合うよう、働きかけ続けていただきたい。

◇今後の集いに望む内容

エネルギーについて。

色々な森林空間の利用方法についての取り組み事例を知りたいです。

真似できる事例。今回のような新たな視点からの話。

森林サービス産業の実践とその課題について。

生態系と生物多様性。

森林環境教育、森林と金融。

森の生態系。

気候危機の時代における森林・土壌の重要な役割。

アーカイブがあるのは、とても助かります。

事務局さんは大変だったことと思います。本当にお疲れ様でした！"

福島県会津地区に森林に関わる NPO 法人等があれば、来年は活動状況報告があれば良いと思います。

これまでの「森林と市民を結ぶ全国の集い」

回	開催地	開催日程	開催テーマ
第１回	東京	1996/2/16～18	市民が支える森林づくり
第２回	東京	1997/3/1～2	「市民が支える森林づくり」の実現をめざして
第３回	大阪	1998/2/21～22	「市民が支える森林づくり」の新たな合意をめざして
第４回	宮城	1998/12/5～6	「市民が支える森林づくり」の新たな活動の広がりをめざして
第５回	高知	1999/8/19～22	山の中で考えよう！「みんなで支える森林づくり」私たちがめざすべきものは何か
第６回	東京	2000/9/15～17	暮らしとともに築く森づくり
第７回	広島	2001/2/9～11	新世紀　森林づくり・地域づくり・人づくり－よりよき関わりを求めてー
第８回	群馬	2002/9/14～16	ともに森を治める社会をつくりだすために 森と人と未来のための群馬ビジョン
第９回	北海道	2003/11/1～4	地域に根ざした森林とのおつき合い 森林づくりの現在を理念から行動へ
第１０回	東京	2004/9/18～20	森とともに創るこれからの社会
第１１回	愛知	2005/8/26～28	森がうごく、人がうごく。そしてネットワークへ。森と人との関係をさらに深める。
第１２回	大阪	2006/11/11～12	みんなが創る森づくり　森と共に生きる社会をめざして～参加から協働へ～
第１３回	福岡	2008/3/8～9	暮らしにつながる森づくり
第１４回	東京	2009/12/5～6	今、あらためて問う「森林」の価値
第１５回	岐阜	2011/6/4～5	裏木曽の森を歩こう
第１６回	東京	2011/10/9～10	世界森林アクション・サミット
第１７回	島根	2012/11/2～4	神在月に集え！島根へ！ ～森林と木を活かす縁結び～
第１８回	東京	2014/3/22～23	暮らしとつなげる森林の恵み～都市の視点から考える
第１９回	福島	2015/6/12～14	東北復興に果たす森林の役割と市民活動
第２０回	東京	2016/6/11-6/12	温故知森～森と私たちとを結ぶ新たな道～
第２１回	京都	2017/6/10-6/11	伝統－森林－未来へ～森林と関わる暮らしの歴史を学ぶ～
第２２回	東京	2018/6/16-6/17	変わりはじめた「山」・「ひと」・「街」～森の価値を分かちあう～
第２３回	静岡	2019/6/15～6/16	あなたの森林・里山との「関わりしろ」を考える
第２４回	東京	2020/3/14～3/15 開催中止	世界が取り組む SDGs を、私たちの森に活かす！～ともに学び、ともに歩む仲間をつくろう～

「森林と市民を結ぶ全国の集い 2021」実行委員 スタッフ名簿

名前	所属・肩書	役割
内山　節	哲学者、森づくりフォーラム代表理事	実行委員長
鹿住　貴之	認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK 理事・事務局長	副実行委員長
手塚　さや香	釜石リージョナルコーディネーター（釜援隊）	東北（岩手県）
中安　祐太	合同会社 百（MoMo）	東北（宮城県）
朏　昌汰	合同会社 百（MoMo）	東北（宮城県）
宮川　卓士	合同会社 百（MoMo）	東北（宮城県）
下条　真輝	いわき市田人地区 地域おこし協力隊	東北（福島県）
塚本　竜也	NPO 法人 トチギ環境未来基地 代表理事	東北（福島県）
松崎　和敬	NPO 法人 いわきの森に親しむ会 副理事長	東北（福島県）
赤池　円	私の森.jp 編集長	東京（テーマ別セッション）
石山　恵子	遊学の道 Project 代表	東京（テーマ別セッション）
小野　なぎさ	一般社団法人 森と未来 代表理事	東京（オープニング）
後藤　洋一	NPO 法人 樹木・環境ネットワーク協会 事務局長	東京（テーマ別セッション・オンライン参加サポート）
坂本　有希	フェアウッド・パートナーズ／一般財団法人 地球・人間環境フォーラム	東京（テーマ別セッション）
中島　大輔	自伐林家 / NPO 法人 青梅林業研究グループ	東京（監事）
星野　晃一郎	株式会社 ダンクソフト 代表取締役	東京（テーマ別セッション・オンライン参加サポート）
水谷　伸吉	一般社団法人 モア・トゥリーズ 事務局長	東京（テーマ別セッション）
東　大介	林野庁 森林利用課 山村振興緑化推進室　課長補佐	オブザーバー
冨永　茂	公益社団法人 国土緑化推進機構 政策企画部長	国土緑推（東北プログラム）
矢島　万理	公益社団法人 国土緑化推進機構 政策企画部	国土緑推（テーマ別セッション）
山本　洋道	公益社団法人 国土緑化推進機構 政策企画部	国土緑推（テーマ別セッション）
宮本　至	NPO 法人 森づくりフォーラム 事務局長	事務局
石井　春花	NPO 法人 森づくりフォーラム 事務局スタッフ	事務局
中沢　和彦	NPO 法人 森づくりフォーラム 広報部スタッフ	事務局

「森林と市民を結ぶ全国の集い 2021」報告書

発　行　日　　2021 年 6 月
編集・発行　　「森林と市民を結ぶ全国の集い 2021」実行委員会
事　務　局　　NPO 法人森づくりフォーラム
東京都文京区本郷 2-25-14 第一ライトビル 405
E-mail：tsudoi@moridukuri.jp
編集・校正　　石山 恵子、中沢 和彦
本集いは、「緑と水の森林ファンド中央事業」として実施されました。